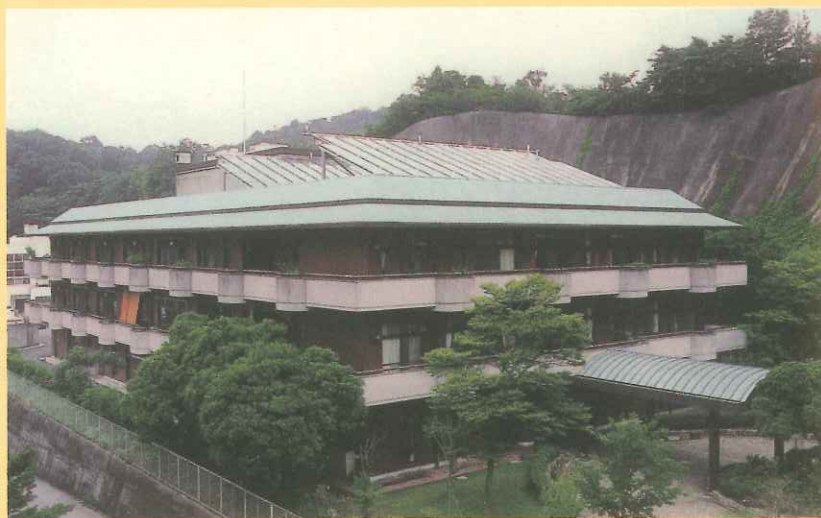


神田山やすらぎ園

特 別 養 護



神田山やすらぎ園は、市内の北東部神田山丘陵地帯に位置し、眼下には太田川や、川沿いに広がる町並み、周辺には四季を通じて桜並木・深緑・紅葉と心やすまる景観にめぐまれた所にあり、昭和57年（1982年）6月に入園定員100人の特別養護施設として開設された。

所在地：〒732-0086 広島市東区牛田新町一丁目18番2号
(TEL 082-223-1390)
(FAX 082-221-5985)

両親に助けられた命

岡 本 忍み子（八十四歳）



被 爆 地 …… 己斐町（爆心地より二・五km）

当時の急性症状 …… 切り傷・脱毛・発熱・歯茎の出血

家族の死亡 …… なし

現在の病状 …… 変形性脊椎症・変形性頸椎症

被爆時の状況及びその後の生活

当時、私は十五歳で、尋常高等小学校を卒業し、陸軍派遣看護婦養成所（現、日赤病院）に通っていました。

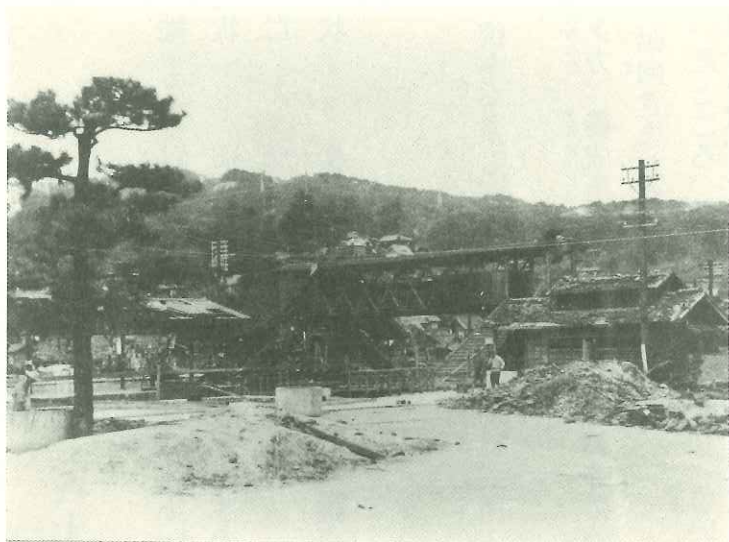
物資を取りに行くため、八月五日の夕方、養成所の人達と己斐のお寺に泊まり、六日の朝早くに配給のある己斐小学校に出向きました。

校舎の二階から一階へ物資を運んでいたところ、外がピカツと光り、急いで窓の所へ行った瞬間、衝撃を受けました。その時は額にガラスが刺さっていることも気がつ

きませんでした。皆が教室から逃げるので、私も救急靴も持たず、裸足で逃げました。教室から出た時には黒い雨が降り始めていて、雨の中、防空壕のある山へ登りました。そこへは、次々と焼けただれた人や、眼球がぶら下がったままの人が逃げてきました。

翌日からは、怪我人や死んだ人を運ばなくてはいけなくなりました。校庭には、人が山積みになっていて、五列の大きな穴が掘ってあり、その中に死んだ人をパターンパターンと落としていきました。

一か月位して、戸河内の実家に帰りました。それから暫くすると、髪



己斐駅

爆心地から約2500m。東方から西方に望む。己斐駅（西広島）は原爆の爆風によって倒潰、上下線をまたぐ陸橋のみ残る。

（川本俊雄氏撮影／川本祥雄氏提供）

の毛が全部^{ぜんぶ}抜け、鼻^{はな}血^ち・菌^{きん}茎^{けい}からの出^{しゅつ}血^{けつ}・高^{こう}熱^{ねつ}で起^おきていられなくなりました。

母^{はは}は、そんな私^{わたし}を助^{たす}けたい一心^{いっしん}で、体に良^よいからと、米^{こめ}と引^ひき換^かえに鶏^{にわとり}の血^ちとガラ

(鶏^{にわとり}の骨^{ほね}を煮^にいたもの)を持^もつて帰^{かえ}つてくれました。

鶏^{にわとり}の血^ちは持^もつて帰^{かえ}つた時には固^{かた}まっていたので、それに砂^さ糖^{とう}をか^かけて羊^{よう}羹^{かん}だと思^{おも}つ

て食^くべなさいと言^いわれました。鶏^{にわとり}ガラで作^{つく}つたスー^{すー}プも時^{とき}間^{かん}を空^あけず^ずに飲^のまされまし

た。今^{いま}では鶏^{にわとり}で作^{つく}つた料^{りょう}理^りは苦^く手^てです。でも、このお蔭^{かげ}で布^ふ団^{たん}の上^{うへ}に起^おきて座^{すわ}れるよ

うになりました。傷^{きず}が癒^いえてからは、父^{ちち}が朝^あ晩^{ばん}お風^{ふう}呂^ろに入^いれてくれました。両^{りやう}親^{しん}には、

本^{ほん}当^{とう}に感^{かん}謝^{しゃ}しています。

結^{けつ}婚^{こん}して二^{ふた}人^{にん}の息^{むすこ}子^こにも恵^{めぐ}まれましたが、娘^{むすめ}盛^{めい}りには、ピカド^あンに遭^あつて体^{てい}が弱^{よわ}い

から貰^{もら}い手^てがないと言^いわれてまし

た。今^{いま}は平^{へい}和^わになりましたが、私^{わたし}はずつと戦^{せん}争^{そう}も原^{げん}爆^{ばく}も卑^ひ怯^{きやう}なことだと思^{おも}っています。

たくさんの人^{ひと}が亡^なくなりました。今^{いま}でも思^{おも}い出^ですと苦^{くる}しくなります。



今でも尽きない妹への思い

勝田光子（九十八歳）



被爆地……富士見町（爆心地より一・一km）

当時の急性症状……怪我（左足）

家族の死亡……妹

現在の病状……心不全・変形性膝関節症・高血圧症

被爆時の状況及びその後の生活

当時、私は二十九歳で、戦争未亡人となっており、お舅さん、娘、まだ学生だった私の妹と、市役所本庁舎裏に住んでいました。

八月六日、朝早くに電車に乗り、食料の買い出しに行つて、帰つてきて、「ただいま、あゝ暑かった」と言い、玄関に入りかけると、四歳だった娘が、「お母ちゃん」と言い走り寄つてきた時のことです。凄まじい閃光が走り、「あれ、何だろう？」と振り返った瞬間、ドーンと大きな騒音と共にあつという間に家は崩れ、下敷きになつていました。

一瞬、失神状態となり、どのくらい時間が経ったのか、ふと我に返ると、辺りは真つ暗でしーんと静まり返っていました。

その時、初めて、「空襲で爆弾が落とされた」と気づき、子供と妹の名を呼び叫びました。二人とも微かな返事があり、生きていました。

兵隊さんに助けを求めましたが、いくら呼んでも叫んでも、何の返事もありませんでした。そのうち、何か衣類の焼けるような臭いがしてきて、このままでは焼け死ぬと思ひ、真つ暗闇の中、手、体にあたる物を力一杯動かし、やつと外へ這い出ることができました。

辺りの家はすべて倒れ、誰一人姿がありませんでした。その上、四、五メートル先に火が迫って来ていました。

二人を助けるため、必死に力を振り絞り、瓦や柱を払い除けながら、助け出した時には、もう目前に火が近づいていました。

それから、迫る炎に迫られるように夢中で歩きました。比治山橋の通りまで逃げてきた私達が見た有様は、まさに生き地獄そのものでした。道中でも、何処からか、「助けて、助けて」という声が聞こえるのですが、どうすることも出来ず、「水を頂戴、水、水」と叫ぶ人にも、「あげたら死ぬぞ!」と怒られて何も出来ませんでした。それでも、多くの人が水槽の中に顔を突っ込んで亡くなっていました。あの時、どうせ

助^{すけ}からない命^{いのち}なら、しつかり飲^のませてあげれば、どんなに喜^{よろこ}ばれたのではと、今でも、あの光景^{こうけい}を思い起^おこします。

その後、丹那^{たんな}の方に逃^にげ、その近く^{ちかく}の知人^{ちじん}の所^{ところ}で二三日お世話^{せわ}になりましたが、結婚^{けっこん}して別^{べつ}の所^{ところ}に住^すんでいた妹^{いもうと}のことが心配^{しんぱい}になり、大芝町^{おおしばちやう}へと向^むかいました。

その途中^{とちゆう}、この目で見た様子^{ようす}は、どの橋^{はし}の袂^{たもと}にも両方^{りやうほう}ずらつと並^{なら}べられた死体^{したい}、川^{かわ}を覗^{のぞ}けば大きく腫^はれ上がった死体^{したい}が筏^{いかだ}のように浮^うかんでいました。縮景園^{しゆくけいえん}の辺^{あた}りでは、あちこちで死体^{したい}を山積^{やまづみ}にし焼^やいておりました。

そうした中^{なかに}を抜^ぬけて、やつと辿^{たど}り着^つきましたが、家は焼^やけて無^なくなっており、妹^{いもうと}の姿^{すがた}もありませんでした。今も行方不明^{ゆくえふめい}のままです。どんな思^{おも}いで、どんな姿^{すがた}で亡^なくなつたのか、時^{とき}だけが過^すぎてしまひ、今でも思^{おも}いは尽^つきません。

その後、亡^なき夫^{おとど}の里^{さと}である可部町^{かべちやう}の三入^{みいり}に行^いき、しばらくして夫^{おとど}の実^{じつ}の弟^{にい}と再婚^{さいこん}し、息子^{むすこ}にも恵^{めぐ}まれました。

毎年、原爆^{げんぱく}の日^ひが近^きづく^と、あの忌^いまわしい惨状^{さんじやう}が、また新^{あら}たに甦^{よみがえ}つてきます。たつた一つの原爆^{げんぱく}で、何も罪^{つみ}のない多^{おほい}くの人々^{ひと}が、あの暑^{あつ}さの中^{なか}で苦^{くる}しみ、喘^{あえ}ぎつ^つつ亡^なくなつていきましました。今の日本^{にっぽん}の平和^{へいわ}の礎^{いしずえ}となつた方に申^{もう}し訳^{わけ}ない気持^{きもち}ちで一杯^{いっぱい}です。

実際^{じつさい}に被爆^{ひばく}した者^{もの}として、平和^{へいわ}を願^{ねが}ひ、少^{すこ}しでも、あの悲惨^{ひさん}なできごとを皆^{みな}さんに継承^{けいしょう}してい^いき、生^{なま}きてい^いる証^{あかし}を残^{のこ}したいと思^{おも}います。

自分だけが生き残^{のこ}つて

金 藤 久 代（八十五歳）



被 爆 地 …… 大州町（爆心地より三・〇 km）

当時の急性症状 …… なし

家族の死亡 …… 父親・母親

現在の病状 …… 高血圧症・腰部脊柱管狭窄症

被爆時の状況及びその後の生活

当時、私は十六歳で、比治山高等女学校の三年生でした。

八月六日は、学徒動員で、大州にある中国配電の工場にいました。

工場の廊下を歩いていたら、遠くから黄色い光が自分に向かって来て、ドカーンと

音がしたと思ったら、爆風で五メートル位吹き飛ばされていました。気が付くと、髪の毛の中にガラスの破片がたくさん入っていました。

工場の窓ガラスは全部吹き飛ばされましたが、建物は残っていました。

私の家は大手町八丁目にありました。市内が燃えているということだったので、帰

ることは出来ず、女学校のみんなと比治山に上がり一晚を過ごしました。朝になつてもあちらこちらで煙が上がり、所どころ火は燃え続けていました。

何かあつた時には、長束にある母方の伯父さんの家に集まるようにしていたので、長束に向かつていたところ、偶然、横川で伯父さんに出会いました。伯父さんから、「これから、お母さんを探しに行つてくる。お父さんは長束に帰つて来ているから早く帰りなさい」と言われ別れました。

紙屋町に仕事に行つていた父は、全身に火傷を負つており、十六日に亡くなりました。母は、勤勞奉仕で鷹の橋に行つていましたが、見つけることが出来ませんでした。両親はいない、家もない、どうして生きていけばいいのか途方に迷いました。

父の妹が吉田町にいたので、その叔母さんの家にお世話になりながら、広島県立吉田高等女学校を卒業して、農林省の統計調査事務所に勤めました。

火傷でケロイドの残つた人や、手足のない人が多くおられる中、切傷程度で大きな病氣もせず生き残っている自分を、恥ずかしく思つたことがありました。

現在は、神田山やすらぎ園に入園させていただき安心して生活しています。ここでの生活は有難い気持ちでいっぱいです。こんな平和な日がいつまでも続くよう祈つています。

母の分まで生きてこられた幸せしあわ

平野 ヒサエ（八十七歳）



被爆地……入市（八月十日・松原町）
まつばらちょう

当時の急性症状……なし

家族の死亡……母親

現在の病状……高脂血症・変形性脊椎症

被爆時の状況及びその後の生活

昭和二十年三月、十七歳で山陽女学校を卒業してすぐに、挺身隊ていしんたいとして、呉市海軍くれかいぐん工廠こうしょうの分工場ぶんこうじょうに勤務きんむしていました。一時、帰省きせいしていた廿日市の実家じつかから、八月五日の夕方には、吉浦よしうら（狩留賀町）かるがちょうにある宿舎しゅくしゃに戻もどっていました。

八月六日、お腹なかを壊こわして、工場を休んで宿舎しゅくしゃの二階にいたところ、外がピカーツと光つたと同時にドカーンと、すごい音がして煙けむりが上がるのが見えました。

しばらくすると、広島市内から、人がどんどんと帰って来て、「広島がやられた」

と言っていました、一体、何が起こったのか分かりませんでした。

廿日市の義理の姉から、「おかあさんが市内に出たきり行方が分からない。すぐに帰ってきなさい」と電話が入りました。

八月十日、やっと汽車の切符が買え、吉浦駅から呉線で広島駅へ行こうと乗り込みましたが、広島駅の手前で降ろされました。

その後は、宮島線が通っている己斐駅を目指して、まだ火や煙が燻っている町の中を、ひたすら西に向かつて歩きました。

己斐橋の手前まで行くと、橋も線路も落ちて無くなっておりました。かろうじて残っていた庚午橋を渡って、草津から宮島線に乗り、廿日市に着いた時には夕方になっていました。

家に帰ると、行方不明になっていた母は、お骨になって帰っていました。父の話では、雑魚場町（現・国泰寺町）へ建物疎開の作業に行っていて被爆し、水道栓の傍で亡くなっており、名札で母だと分かったようです。

避難所になっていた廿日市の近くの学校の講堂では、傷の手当てをしたり、火傷で唇が腫れ上がっている人には、水ではなく、氷を口に含ませたりしていました。

廿日市の港にも、毎日のように死体が流れ着きました。学校の校庭が焼き場になっ

ており、亡^なくなった人に、ガソリン^{ガソリン}?を掛^かけて焼^やいていました。何とも言いようのない、その臭^{にお}いは、今でもはつきり憶^{おぼ}えています。

昭和二十二年、二十歳で結^{けつ}婚^{こん}しました。三人の娘^{むすめ}にも恵^{めぐ}まれ、皆、良い子^こに育^{そだ}つてくれ、色々^{めんどろ}と面倒^{めんどう}を見てくれています。

昭和三十八年に南^{みな}観^{かん}音^{おん}町^{まち}に引^ひ越^こしました。昭和五十三年に夫^{おと}が亡^なくなった後、一人暮^ぐらしをしていましたが、平成十三年十二月から、舟^{ふね}入^いむつみ園^{えん}で九年間お世^せ話^わになりました。

平成二十三年二月、やすらぎ園に移^{うつ}つてからは、皆^{みな}さんに良くしてもらって、もつたいないくらい幸^{しあ}せです。何もお返^{かえ}しができませんが、ここで最^{さい}期^きまでお世^せ話^わになりたいと思います。

あの日、母^{いのち}の命^{いのち}を奪^{うば}つた原^{げん}爆^{ばく}を呪^{のろ}つたこともありました。二度とあつてはいけなことです。

戦^{せん}争^{そう}のない、核^{かく}のない世界^{せかい}で、皆^{みな}が平^{へい}和^わに暮^くらせるように願^{ねが}っています。



戦争を繰り返してはいけない

増岡 ミサコ（九十五歳）



被爆地……入市（八月八日・舟入中町）
ふないりなかまち

当時の急性症状……なし

家族の死亡……叔父

現在の病状……高血圧症・変形性脊椎症

被爆時の状況及びその後の生活

当時、私は二十六歳で、両親と兄弟姉妹の七人で廿日市市の佐方に住んでいました。
とうじ りょうしん きょうだいしまい はつかいちし さかた す

八月六日の朝、家の中にとても良い天気なのに突然にピカッと光ったので、
かみなり えんじま のうみじま たな お ひこうき
雷かと思ったら、ドーンと音がして、棚に置いてあった鍋などが落ちてきました。

外を見ると、江田島や能美島あたりの空に飛行機が飛んでいました。
ひるまえ さんようじょう げんざい こくどう

昼前、山陽道（現在の国道二号線）を歩いている人を見ると、服は破れて、手の皮膚は剥けており、「広島で新型爆弾が落とされた」と聞きました。
ふ ひるまえ さんようじょう げんざい こくどう しんがたはくだん

二日ほど経^たつて、広島市内に叔父^{おじ}さんを探^{さが}しに行くと、他^{ほか}の人^{ひと}もたくさん家族^{かぞく}を探^{さが}していました。曙部隊^{あかつきぶたい}の案内^{あんない}で三日間探^{さが}しましたが、名簿^{めいぼ}にもなく連絡^{れんらく}もないので、死^しんでしまったんだと思いました。未だ^{いま}に行方^{ゆくえ}はわかりません。

己斐^{こい}、宇品^{うしな}、広島駅周辺^{しゅうへん}と歩^あきましたが、どこも建物^{たてもの}は崩^{くず}れ焼け野原^{やまづ}となっていました。そんな中で、体の半分^{はんぶん}が焼^やけている人達^{たち}が重^{かさ}なり合^あって山積^{やまつ}みになっていました。元安川^{もとやすがわ}に飛^とび込^こんでいる、たくさんの人の姿^{すがた}も見^みました。「水をください」と言う人もいましたが、水をあげてはいけないと言^いわれていたので、どうすることもできませんでした。どうせ亡^なくなるなら、最後^{さいご}に水を飲^のませてあげれば良かったと後悔^{こうかい}することもあります。また、今でも、廿日市^{はつかいち}の海^{うみ}に女の子^{おんなこ}の死体^{したい}が流^{なが}れていたことが忘^{わす}れられ^{わす}れません。

平和^{へいわ}学習^{がくしゅう}に來^きられる生徒^{せいと}さん達^{たち}に、戦争^{せんそう}は絶對^{ぜつたい}に繰^くり返^{かえ}してはいけないことを伝^{つた}えていきたいです。



消えない悲惨な光景

宮 尾 美奈子（八十五歳）



被 爆 地 …… 松原町（爆心地より二・〇km）

当時の急性症状 …… なし

家族の死亡 …… なし

現在の病状 …… 慢性心不全・糖尿病

被爆時の状況及びその後の生活

当時、私は十七歳で両親と三人暮らしで矢野に住んでいました。その日、友達と一緒に汽車に乗り、可部にある鉄工所に通っていた時のことです。広島駅で停車中、中学生が「空襲警報が解除された」と話していた矢先にピカッと光り、汽車の中でも見えなくなりました。

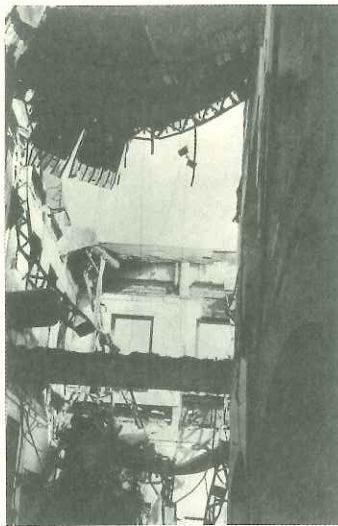
何とか汽車から降りて改札口に向かいましたが、友達とはぐれてしまいました。改札口から出ていく人は皆頭が真っ白で、中には頭や顔にガラスの破片が刺さり血がダ

ラダラ出ている人もいて、牛田方面に逃げていました。

私は恐ろしくて、自宅に帰ろうと矢野に向かって逃げましたが、気がつくとも靴も履かず裸足になっていました。猿猴橋の辺りでは、家がぺちゃんこになっていて、外にいた叔母さんから、「三〇四人が家の下敷きになっていたので、助けてやって下さい」と頼まれましたが、一人ではどうすることもできませんでした。家の下敷きになっている人が、「うーん、うーん、助けてえ」と言っている声や、女学生が服が焼けて真っ裸になって走っている姿は、今でも忘れられません。大洲の辺りでは、川に死んだ人が浮いていたり、土手にも死んだ人がたくさん重なっていました。海田の辺りでは、大八車を引いた人達が、「広島で大事になった」と広島市内に向かっていました。

被爆後、特に体調を崩すこともなく、5か月後に結婚して子供を授かりましたが、暫くの間、空襲で子供と一緒に逃げる夢ばかり見ていました。

今は神田山やすらぎ園に入って安心して毎日過ごしています。戦争は二度としてはいけません。いつまでも平和な世界であるよう祈っています。



広島駅の内部

爆心地から1900m広島駅の内部、爆風によって窓ガラスは砕けとんだ。

(中田左都男氏撮影／広島平和記念資料館提供)

広島ふつこうの復興ねがを願ねがって

門 出 春 三 (八十八歳)



被 爆 地 …… 入市 (八月十七日・松原町)
まつばらちよう

当時の急性症状 …… なし

家族の死亡 …… なし

現在の病状 …… 高血圧症・脳梗塞後遺症・不安神経症

被爆時の状況及びその後の生活

その当時、私は十九歳で東京武蔵野むさしのの通信隊つうしんたいに所属しよぞくしていました。八月六日は米軍戦闘べいぐんせんとう機きが飛び回まわっており、機銃操作きじゆうそうさを避さけるため、小さな川に架かかっていた土橋どばしの下に戦友せんゆうと隠かくれていました。部隊ぶたいには参謀本部直轄さんぼうほんぶちよくの傍受ぼうじゆの司令部しれいぶがあり、そこからの情報じようほうで、広島に大きな爆弾ばくだんが落ち、壊滅かいめつしたと聞ききました。不安ふあんであつたが、自分の家は安佐郡あさぐんの安村やすむらで、市内から十キロメートル以上離はなれていたので大丈夫だいじようぶだろうと思おもいました。

八月十五日、天皇陛下てんのうへいかのお言葉しゆうせんを聞ききました。終戦しゆうせんとなつたことで、「遠くものの者はすぐ

家に帰りなさい」と、わずかな運賃をもらい、東京多摩から広島に向かいました。十五時位の列車に乗り、車中で、広島に落ちたのは原子爆弾であつたと知りました。各駅停車のため一昼夜をかけ十七日の朝広島に着き、駅のホームに立つと果然としました。一面の焼け野原で何もなく、宇品の方まで見渡せたのです。周りは、未だ煙がくすぶつていました。広島駅から徒歩で横川に向かい、可部線は三滝駅までが止まっていたので、三滝駅まで歩きました。三篠橋は、半分が崩れ落ちていました。古市橋駅まで汽車に乗り、四キロメートル程歩き自宅のある高取に着きました。家族は皆、原爆は受けておらず無事でした。

入隊前の職場（国鉄に三年間）の方々の安否が気になり、翌日から職場のある矢賀へ通いました。自宅から古市橋駅まで自転車で行き、古市橋駅から横川駅まで汽車に乗り、横川駅から広島駅まで歩き、その先、まだ芸備線が通つてなかつたため、さらに歩いて通いました。矢賀の街は、壊れている家もありましたが、比較的建物の状態は保たれていました。工場の窓ガラスは全部吹き飛ばされていて、シートで覆われていました。従業員の人は皆来ておられました。休むことなど考えもせず職場に通いました。あちらこちらに煙が上がり、人を焼いている光景を目の当たりにしながらも、ひたすら仕事に専念しました。今思えば広島復興を願い、信じていたのだと思います。二度とこのような過ちは犯してもらいたくないと思います。

忘れえぬ被爆^{わす ひばく}

山崎 美代子（八十九歳）



被爆地……打越町（爆心地より二・〇km）

当時の急性症状……なし

家族の死亡……なし

現在の病状……なし

被爆時の状況及びその後の生活

私は当時^{とうじ}、打越町^{うちこしちょう}に住んでいました。十九歳で結婚^{けっこん}して二週間^{ふたしゅうかん}経^たったばかりの八月六日の朝^{しゅじん}、主人^{ひかりまち}は光町^{みつまち}にある鉄道局^{てつどうきょく}に勤^{つと}めに行きました。私は部屋^{へや}の隅^{すみ}にある鏡台^{きやうだい}の前^{みじたく}で、身仕度^{みじたく}していた時のことです。

ドカーンと大きい音がしたと同時に、玄関^{げんかん}まで吹き飛ば^ふされていきました。家は傾^{かたむ}き、壁^{かべ}やガラスは木^こっ端^{はみじん}微塵^{まわ}となり、周り^{まわ}は煙^{けむり}で灰色^{はい}でした。その時の爆風^{はくふう}と何とも言いようのない臭^{にお}いは、今でもしっかりと憶^{おぼ}えています。

裏の小屋の中にいた義父は軽い火傷で済みましたが、義母は小屋の外にいたため、身につけていたのは腰巻だけの裸同然の姿で、肩にひどい火傷を負っていました。

街から勤労奉仕の人達が北に向かつて歩いていましたが、裸同然で、手の皮が剥けてワカメのようにぶらさがり、「水をくれ、水をくれ」と言っていました。その光景は正に地獄のようでした。

私と義父母は避難のため川縁を北へ向かつて歩いて行く中、ポツポツと雨になり、雨粒の落ちた川面が真っ黒になっていきました。

暫く経って家に戻ると、主人も元氣に戻ってきており、その後は、防空壕での生活を続けました。義母のやけどの治療には、薬がないので食用油を付けたりもしましたが、なかなか治りませんでした。

広島まちの街は、建物たものが倒れ瓦礫がれきの山となり、果ての果てまで見えていました。当時の話しを聞くのと、光景を想像するのでは大きな違いがあります。実際に原爆

にあった人でないと分からないと思います。原爆投下は二度とあってはいけません。核兵器は人類を滅亡させます。絶対に製造してはいけなねがいと切に願います。

